



脚立を使いながら壮大なサイズの作品を制作

# 特別版 実は曾於市とつながるスゴイ人



画家・吉井淳二記念大賞展審査員

## えんどう あきこ 遠藤 彰子さん

東京都生まれの洋画家。武蔵野美術大学油絵学科名誉教授。平成18年度芸術選奨文部科学大臣賞（美術部門）を受賞、平成26年には紫綬褒章を受章。作品は美術の教科書にも掲載。30年以上にわたり500～1500号の大作を描き続けている。令和3年の第38回吉井淳二記念大賞展から5年連続で審査員を務める。

※中央の絵は遠藤さんの作品

### 今

回は、画家で吉井淳二記念大賞展の審査員をされている遠藤彰子さんに話を伺ってきました。

——小さい頃はどのような子どもでしたか

小学生のころは毎日のようにアスファルトの道路に蠟石ろうせきで絵を描いている子どもでした。高校生になるとヒエロニムス・ボスとピーテル・ブリューゲルが好きになりました。この二人は絵として大きな構成ができていながら、細かいところまで神経を使って描いているので、影響を受けた画家です。

——画家になると決意したのはいつですか

22歳の時にインドに行きました。3歳くらいの子どもの自転車が空気を入れる仕事をして働いていたんです。その様子を見て人間は働かないといけないんだと感じ「どんなことがあっても絵描きになるぞ」と決意しました。それから50年以上経ちましたが絵を描かない日はありません。

——500号を超える大きな作品はいつ頃、どのようにして描き始めたのですか

若い時は不可思議な感じが好きで、哀愁がありながらも頑張っているという想いを作品にしていました。40代になり、同じ表現で繰り返し描き続けることに疑問を感じ、500号サイズ（縦約2.5メートル・横約3.3メートル）の作品に取り組むようになりました。サイズにあう構図やイメージを考えることが、大きな作品の醍醐味です。これまでに500～1500号サイズを37作品描きました。

——数ある展覧会の中で吉井淳二記念大賞展はどのような存在ですか

展覧会は年齢で分かれていることが多いので、幼児から90代までの作品が一堂に並ぶ展覧会は全国的にも珍しいです。大人・子どもの双方が交流する姿は素晴らしい、とても良い取り組みだと思います。

展覧会も継続することで力が付きます。辞めることは簡単ですが、これだけ地域の文化に根差した歴史ある賞展は貴重です。うまく続けてもらって、今の形を継続してほしいです。

——最後にこれからの目標を教えてください

今年で78歳になりますが「今でしょ」と思っていて、自分がドキドキする絵時代に合う絵、私と結びつくような絵を描いていきたいです。どうなるのかわからないからこそ挑戦しないと。挑戦することで次なる価値を生み出していきたいですね。失敗を恐れたら何もできませんよ。



吉井淳二記念大賞展の審査で作品と向き合う